



The Japanese Association
of Organic Geochemists

Newsletter

Organic Geochemistry 77

May. 3, 2023

目次

Invitation 2

第 40 回有機地球化学シンポジウム ファーストサーキュラー

世話人一同

Report 3

開催報告：第 39 回有機地球化学シンポジウム

世話人一同

People 5

「We are all connected」

滝沢侑子

Information 9

一般社団法人 日本有機地球化学会 2022 年度年会費のお支払いにつきまして

日本有機地球化学会 2023・2024 年度役員候補者選挙のご案内

Announcement 11

2023 年度有機地球化学賞（学術賞）選考候補者推薦の募集

研究奨励賞（田口賞）2023 年度受賞候補者の募集

ROG が完全電子化、ROG 38 巻を発行 ROG 39 巻へ論文を投稿しましょう！

編集後記 14

Invitation

第 40 回有機地球化学シンポジウム ファーストサーキュラー

8月9-10日に九州大学伊都キャンパスにおいて第40回有機地球化学シンポジウムを開催します。

コロナ禍の間、オンライン・ハイブリッドでの開催でしたが、対面での発表・議論を基本とし、補助的にオンライン配信を考えています。(Zoomを用いた口頭発表・議論が可能予定)福岡県では1993年大牟田、2001年志賀島、2011年西新に続き、4回目の開催になります。ぜひご参加いただき、久しぶりの対面での交流をお願いします。

<実施要項>

主催：一般社団法人 日本有機地球化学会

日時：2023年8月9, 10日(水, 木)

場所：九州大学伊都キャンパスウエスト1号館講義棟201

講演：受賞講演、一般発表(口頭、ポスター(件数の多い場合))

参加費：4,000円(オンサイト)、2,000円(オンライン)

(支払方法は現地徴収または振込を予定しています。詳細は後ほど)

発表申込締切および現地参加登録締切：7月1日(土)

要旨提出締切：7月15日(土)

オンライン参加登録締切：7月31日(月)

問合先：奈良岡 naraoka_AT_geo.kyushu-u.ac.jp (ATを@に変更)

伊都キャンパスは福岡市中心地から地下鉄・バスで1時間ほどかかります。

<https://www.kyushu-u.ac.jp/ja/campus/ito/>

糸島市にも何軒かのホテルがあり、近くて便利です。福岡市内には多くのホテルがありますが、8月2-11日の間に世界マスターズ水泳選手権が開催されますので、早めの予約をおすすめします。発表申込様式、要旨様式、参加登録様式の情報を学会メール等で随時通知いたします。



Report

開催報告：第 39 回有機地球化学シンポジウム

第 39 回有機地球化学シンポジウム（2022 年横須賀シンポジウム）は、2022 年（令和 4 年）12 月 15 日（木）に、Zoom を用いて、オンライン開催されました。参加者は、60 名以上でした。投稿料・参加費は、すべて無料（本会会員：正会員、学生会員、賛助会員、シニア会員および入会手続き中を含む）としました。一般講演および受賞講演（田口賞・学術賞）は、すべて口頭発表（ポスター発表なし）で行いました。終始、いろいろな視点から活発に議論が行われ、充実したシンポジウムの日でした。

最優秀学生発表賞（審査 1 位）には、林 和生 会員（北海道大学）が選出されました。後日、同会員に表彰状および副賞が、授与されました。副賞には、50 周年コラボ企画として、2022 年に発刊した『海洋研究開発機構（JAMSTEC） 創立 50 周年記念誌』（536 ページ）が贈られました。

【シンポジウムの HP】

http://www.ogeochem.jp/info_2022_02.html

【プログラムおよび発表要旨集のダウンロード】

<http://www.ogeochem.jp/pdf/Org2022SympAbs.pdf>

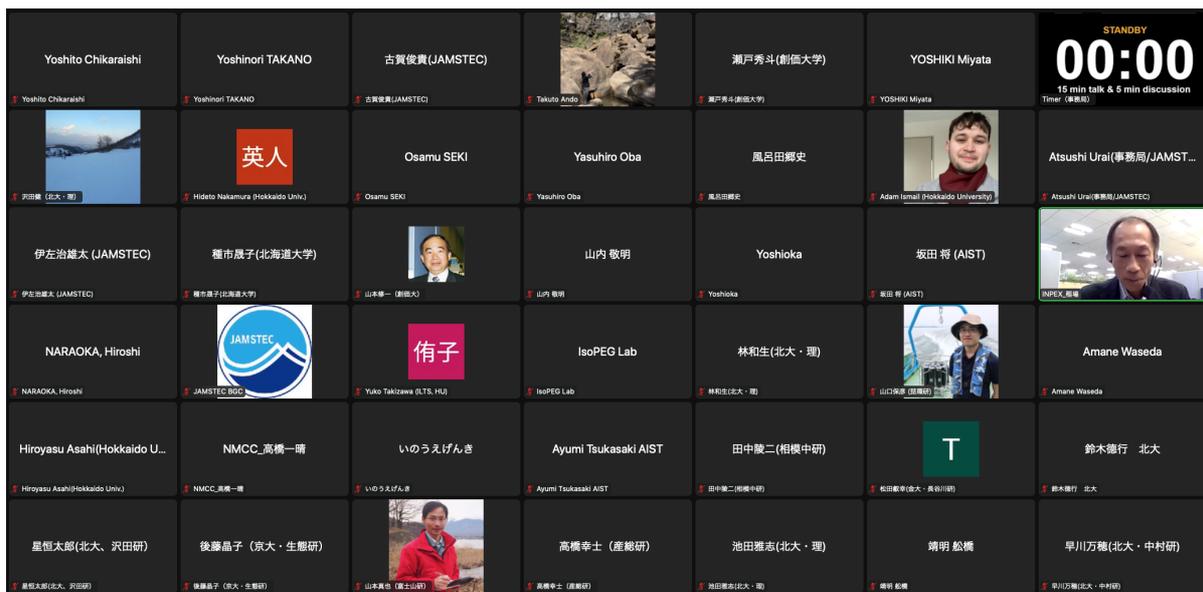
第39回有機地球化学シンポジウム（2022年 横須賀シンポ）



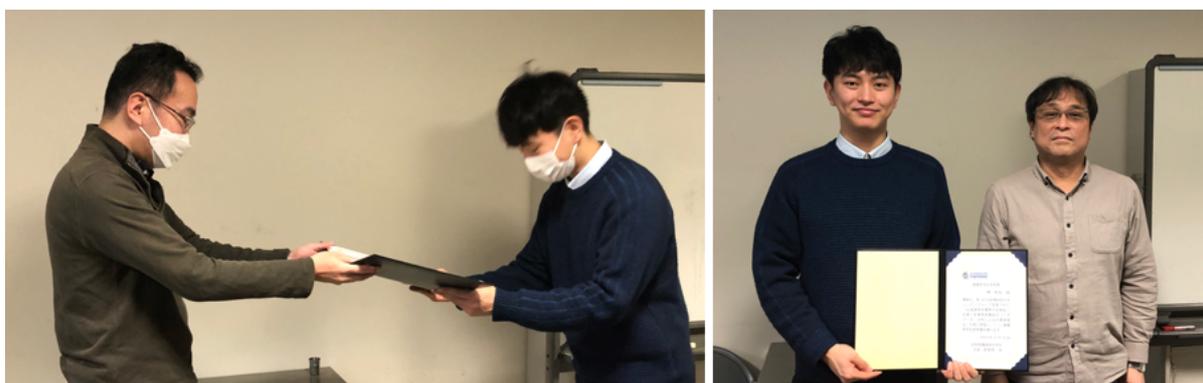
JAMSTEC 海洋研究開発機構 \海と地球の研究所/
@JAMSTEC_PR



日本有機地球化学会の賛助会員紹介（セッション途中のブレイクタイムスクリーン）



閉会前のシンポジウム総括・寸評の様子（セッション後のスクリーン 1/2）



林 和生 会員（北海道大学）への最優秀学生発表賞（理事による受賞式の様子）

一般社団法人 日本有機地球化学会（JAOG: The Japanese Association of Organic Geochemists）は、その前身である有機地球化学談話会の発足（1972年）から50周年を迎えました。

世話人一同：高野 淑識、伊左治 雄太、浦井 暖史、古賀 俊貴（海洋研究開発機構）

People

今回は、北海道大学の滝沢侑子さんにご寄稿いただきました。

「We are all connected」

滝沢侑子（北海道大学・低温科学研究所）

北海道大学の滝沢侑子と申します。この度は Newsletter 編集委員の金子雅紀様よりお声掛け戴き、僭越ながら「People」を執筆する運びとなりました。このような機会を設けてくださり、改めて日本有機地球化学会の皆様に御礼申し上げる所存です。また、自分が今も研究や教育を生業とできていること、その道を示してくださった力石嘉人様（北海道大学）、公文富士夫様（信州大学）、私に居場所を与えてくださった北海道大学低温科学研究所の皆様、博士課程在学中から今に至るまで数々のお力添えをいただいた山本正伸様（北海道大学）、大河内直彦様、小川奈々子様、高野淑識様をはじめとする海洋研究開発機構（JAMSTEC）生物地球化学分野^{*1}の皆様にも、改めて御礼申し上げます。

一体何について話すべきなのか、しばらく考え兼ねておりましたが「一体どのような経緯で今に至ったのか」という質問を、有機地球化学会内外で頻繁に聞かれることを思い出しました。今回はその質問へ応えられるように、併せて、自身の過去を振り返ること、そしてこれから何をしていきたいのかを少しお話したいと思います。

原点は小学生時代

私の出身は群馬県です。小学校は関東平野の西端にあり、学校の裏には山がありました。通学路は二毛作に用いられている農地の隙間の道路、さながら迷路のようでした。「稲や麦の生育に悪影響だから」という理由で、街灯一つ設けられていない田舎で育ちました（図1）。かといってそれに不満を抱いていた訳でもなく、改めて思い返してみると、私の科学者としての原点はこの小学校生活にあったと言えるのかも知れません。遠足では皆で学校近くの山に行き、少し開けたところに寝そべり葉擦れの音に耳を澄ましたり、木漏れ日がキラキラと注ぐ道を歩いたり、秋には美しく色付いた落ち葉を収集したり。木の実を拾って工作したり、砂場からキラキラ光る石を探して厳選したり。夜になれば通学路からでも自宅からでも満天の星空を眺めたりすることもできました。また、小学校全体が環境教育に力を入れており、学校の敷地内にビオトープを作ったり、近くの畑でオオムラサキ^{*2}を保護・繁殖するためのハウスを作ったり、毎年各家庭でサケの稚魚を育てて放流したり^{*3}と、常に周りの誰か、時には自分が「自然と触れる何かしらの活動」を精力的におこなっていました。そして高学年（小学5-6年生）では「総合」という科目で、いくつかのグループに分かれ、それぞれがひとつの「環境問題」に焦点を当て、その現状調査と今後の対策を教員および保護者に対して発表するという課題が与えられたこともありました。当時（2001-2年）の私は、ちょうど「地球温暖化」という脅威の存在を知った頃で、それについて発表したことを覚えています。このような環境で育った所以か、私の中で自然とは「とても美しく、楽しくて、素晴らしいもの」であるにも関わらず「人間活動による脅威に常に晒されている」という認識が強烈に植え付けられていきました。そして「私の大好きな自然がこのままでは次の世代に残せないかもしれない！」という危機感は、年齢を重ねるうちにより強固なものとなっていきました。また、それと同時に「今何が起きているのかを理解して、今後どうするべきかを考え、他者に伝達するという一連の作業そのものが楽しい」ということに気付いたのも、この時だったかも知れません。



図1. 通学路。新幹線の線路だけはある。

充実した研究生活

紆余曲折を経て、私は「信州大学 理学部 物質循環学科^{*4}」に進学しました。長野県松本市にキャンパスを持つ信州大学理学部は、松本平に続く扇状地の上に建っており、通学時には毎日北アルプスを眺め、夏も冬も盆地における放射冷却を肌を感じながら、実習やフィールドワークで様々な場所に赴き、充実した日々を過ごしました。3年次後期からは公文富士夫先生が構える古環境変動学研究室に所属し、第四紀の日本海の古海洋環境を復元することをテーマに研究を実施しました。当時の私は、指導教員との関係も良好で、先輩・後輩にも恵まれ、楽しい研究生活を送っていました(図2)が、かねてより抱いていた「今後地球はどうなるのか」という自分の中に根強く残っている疑問に対して明確な回答を持っていないこと、そして、誤解を恐れずに言えば、自分が得たデータが持つ本質的な意味を、具体的な根拠を持って説明出来ないことに、大きな蟠りを抱えていました^{*5}。そして「ならば一体、何を調べることができれば『根拠を持って説明できる』といえるのだろうか」ということを考える日々が続きました。



図2. 公文研メンバーとのスキー旅行@白馬。矢印が当時B4の筆者。

東より来られし

2013年、修士課程1年のとある日。同大学同学科の福島和夫先生が、とある研究者を招いて講演会を開催することを知りました。その時の講演者こそが力石先生でした。地方大学に所属していると「大学外の研究者」本人の口から研究内容が語られる場に居合わせる機会は、講演会や集中講義に限られています。だからこそ最先端の研究技術の話聞いたあの時間は私にとって大変刺激的で、講演後には力石先生に勇気を振り絞って話しかけたことを覚えています。ちなみにその時、同じ場に居合わせた学生がもう一人いたのですが、それが浦井暖史先生(信州大学)です。力石先生の信州大学への来訪(そしてそれを提案した福島先生)は、結果的に2人の学生の人生を変え、有機地球化学の世界に2人の若者を送り込むことにつながったと言っても過言ではないでしょう。

修士1年当時の自分は「堆積物中の有機物分解や続成作用」に強い関心を抱いており、その「分解の程度」を定量的に評価できないものだろうか、ということをもぼんやりと考えておりました。そのような中で、安定同位体というツールの有用性と可能性を、幼少期～小学生の間に培った野生の勘で嗅ぎ取った私は、どうにか博士課程で力石先生のご指導を賜れないか、その手段を模索することになりました。当時の指導教員である公文先生は、私が力石先生のもとで安定同位体のことやその測定技術を学ぶことにとってもポジティブでしたが、ご退官が近かったこともあり、指導教員にはなれない旨を伝えられました。さてどうしたものか…と悩んでいる時に、相談させていただいたのが、当時、信州大学で集中講義をするために松本までいらしていた山本正伸先生でした。

そして2014年の日本有機地球化学会湯河原シンポジウム(図3)にて、力石先生と山本先生による話し合いを経て、ついに、私が「北海道大学に籍を置きながら、JAMSTECの力石先生のもとで研究する」ことを山本先生が許諾してくださったのでした。今私がここで研究および教育活動を実施できているのはお二人のご厚意の賜であると思っております。改めて御礼申し上げます。



図3. 運命を分けた湯河原シンポジウム(での食事)(美味しかったです)(発表時の写真は見つかりませんでした)。

渡りに船

どうにか北海道大学の博士課程に入学でき、JAMSTECにて研究生としての生活にうっすらと慣れ始めた頃、力石先生に神妙な面持ちで話しかけられました。「俺が北大に異動するって言ったら、滝沢さんはどうする？」と。なんと力石先生には、近いうちに北海道大学の低温科学研究所へ異動する可能性があることを聞かされました。これは私にとってはあまりにも想定外の出来事で晴天の霹靂でしたが、当時は博士課程での目的を「力石先生の中で、有機化合物の安定同位体を分析する技術を習得すること」と定めていたため、力石先生のいないJAMSTECに私だけが残るという選択肢はありません。むしろゼロから研究室を設立する経験をできることに興味を抱きながら、間髪を入れずに「付いていきます」と言ったことをよく覚えています。そして何の因果か、力石先生が北海道大学で担当することになる教育担当部局は、当時の指導教員である山本先生の担当部局（大学院環境科学院 地球圏科学専攻 大気海洋化学・環境変遷学コース⁶）と同じだったのでした。そして最終的には、山本先生のご厚意で、博士課程2年の秋からは指導教員変更の手続きをおこない、私は力石研究室の学生として学業に専念することとなったのでした。ここから先は、多くの皆様をご存知の通りだと思います。

「今」をきちんと理解すること

大変光栄なことに、2021年には日本有機地球化学会の研究奨励賞（田口賞）を受賞することができました。推薦してくださった方々、並びに、選考に携わってくださった方々に改めて御礼申し上げます。私は、博士課程から研究手法やテーマを変え、地質年代の軸にとらわれず「今起きている事柄・現象」に焦点を当てて研究を進めています。このアプローチには、試料をうまく選定することによって『ターゲットとしている自然現象が起きたかどうかを実際に検証ができる』という大きな利点があると考えています。タイムマシンを持っていない私にとっての最適解は「今」をきちんと理解すること、だったのでした。また、かねてより抱いていた「今後地球はどうなってしまうのか？」という問いに対しては、「今起きている自然科学現象を、より正しく多面的に理解すること」こそが、未来の地球を考える上で最も重要であるというひとつの着地点に到達したのでした。このような「基礎研究」を、着実に、一步ずつ進めることによって、今後の人間社会の発展と、環境保全の双方を、両立できるような手段を探るために貢献していきたいと考えています。

おわりに ～“We are all connected”～

この一節は、私の好きな映画：ライオン・キング（1994）にて、王ムファサが、息子シンバに対して、自分たちの周りに広がる世界を説明した時のものです⁷。劇中ではサバンナにおける生態系を例に語られていましたが、私自身は、この言葉には汎用性があり、時には人間関係、時には自分の経験、時には頭の中に点在する知識もまた当てはまるのではないかと解釈しています。私の場合、小学生の頃の経験が自分の根本的な価値観を形成し、当時自分が抱いた疑問に対する答えの手がかりを探るために、今研究を続けています。信州大学への進学が、公文先生という恩師と出会うきっかけを与えてくれました。物質循環学科の「環境問題を体系的に理解すること」というコンセプトが、特定の分野にとらわれない広い視野を養うきっかけとなり、学んだ知識同士が繋がって新しい解釈をもたらした時の感動と興奮を与えてくれました。そしてたまたま開催されていた講演会に参加したことで力石先生に出会い、集中講義を受講したことで山本先生に相談ができ、結果として「安定同位体の測定技術を学ぶ」という明確な目標が生まれたのでした。今までに得た経験の全てが繋がっていて、現在の私を構成しているのだと、確信を持って言えます。

その一方で「ご縁」と「運」に恵まれすぎている人生だという自覚もあります。実力だけでここまで来られるはずがありません。ただ「チャンスが流れてきたら、それがどのような事柄であっても、迷わずつかみ取りに行き、挑戦する」という気持ちを、これからも大切にしていきたいと思っています。まだまだ若輩者ですが、今後とも、ご指導・ご鞭撻の程よろしくお願い致します。



図 4. 公文先生の退官記念パーティーでの写真（左）と、国際有機地球化学会（IMOG2019）でのラボメンバーとの集合写真（右：皆の顔が疲れている）。

注釈

*1 当時の名称。現在は「海洋研究開発機構 生物地球化学センター」

*2 私の記憶が正しければ。チョウ苦手なので記憶が曖昧です...

*3 現在はこの活動の是非が問われていますね...

（参考：Terui et al. (2023) <https://www.pnas.org/doi/10.1073/pnas.2218044120>）

*4 当時の名称。現在は「信州大学 理学部 物質循環学コース」

*5 当時の私は日本海堆積物の全有機炭素量を高時間分解能で測定する仕事をしていました。日本海の有機物埋没フラックスは「夏モンスーンの影響による海洋表層での生物生産」と「冬モンスーンによる深層水の沈み込みに伴う底層の換気による酸化分解」のバランスで決定されると考えられています。当時の私は自分のデータを扱いきれませんでした。2013年のIODP Exp.346 日本海掘削において、様々な水深から完全連続で対比可能な堆積物コアが得られたことで、堆積物中の有機物フラックスの深度分布を求めることができるようになりました。生物生産が多い時は浅い水深の有機物フラックスが大きく、水柱の酸素濃度が高いと分解による有機物フラックスの深度方向の減衰率が激しくなると仮定すれば、日本海における有機物の分解程度を定量的に把握することも可能かもしれません（参考：Iriano T., Millennial- to orbital-scale variabilities of east Asian summer, winter, and inter-monsoons recorded in a set of sediment archives drilled from the Japan Sea, Monsoon Geo Seminars (<https://www.monsoongeoseminars.com/>), April 14, 2021, Online)。

*6 当時の名称。現在は「環境科学院 地球圏科学専攻 生物地球化学コース」

*7 正式には “When we die, our bodies become the grass, and the antelope eat the grass. And so we are all connected in the great circle of life.” となります。

Information

一般社団法人 日本有機地球化学会 2022 年度年会費のお支払いにつきまして

平素より当学会の活動・運営にご理解、ご協力を賜り厚く御礼申し上げます。
本会の会計年度は7月1日より翌年6月30日までとなっており、会員の皆様には、当該期間内に年会費（正会員：年額 3,000 円、学生会員：年額 1,000 円）のお支払いをお願いしております。まだ、お支払いいただけていない会員の皆様におかれましては、ぜひお早めのお支払いをお願いいたします。

年会費のお支払いには、シクミネットによるオンライン決済システム（<https://m6.members-support.jp/ogeochem/>）

（メニュー → お支払い → 会費支払い）をご利用ください。コンビニ、ペイジー、クレジットカードによるお支払いが可能です。

なお、2021 年度以前の年会費の未払い分については、シクミネットによる納付ができません。該当する会員様には、個別メールにてご案内いたしますので、ご対応をお願いいたします。

シクミネット上の会員 ID 及び初期パスワード、会費納入済み年度など、ご不明な点がございましたら、事務局（office@ogeochem.jp）までお問い合わせください。

皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

日本有機地球化学会 会員専用WEB <https://m6.members-support.jp/ogeochem/>

日本有機地球化学会 会員様の個人ページ

メニュー

- ホーム
- ユーザー管理
- イベント情報
- お支払い
- 会費支払い
- 支払状況確認
- その他支払い
- マニュアル
- ログアウト

ホーム

事務局からのお知らせ

2017/12/20 【会員各位へのお問い合わせ】日本有機地球化学会 年会費のお支払いについて [▼続きを読む](#)

イベント情報

2017/12/20 第36回有機地球化学シンポジウム (2018年 品川シンポジウム) について [▼続きを読む](#)

個人情報保護方針 | 運営 | お問い合わせ | スタートアップガイド |

日本有機地球化学会 事務局

Copyright © 2016 日本有機地球化学会 会員様の個人ページ, All rights reserved.

「日本有機地球化学会 2023・2024 年度役員候補者選挙のご案内」

2023・2024 年度役員候補者選挙 選挙管理委員会 委員長 大西雄二

定款第 5 章に従い、2023・2024 年度役員候補者の選挙を以下の日程で行います。

立候補・推薦受付：5 月 31 日（水） 必着
投票期間：6 月 5 日（月）～6 月 21 日（水）
開票：6 月下旬
選挙結果報告：8 月の総会

つきましては、下記要領で会長・副会長・監事・理事に対して、それぞれ立候補または推薦の届け出をしていただくようお願いします。

1. 会長 1 名、副会長 1 名、監事 2 名、理事 10－13 名程度を選出します。
2. 立候補者または推薦者は、下記フォームに記入の上、選挙管理委員会宛に届け出てください。
* 推薦者は候補者の承諾を受けてから推薦してください。
3. 届け出の締め切りは 5 月 31 日(水)必着です。
4. 選挙管理委員会の所在地・連絡先は次のとおりです。

〒603-8047

京都府京都市北区上賀茂本山 457-4 総合地球環境学研究所 内
日本有機地球化学会 2023・2024 年度役員候補者選挙 選挙管理委員会
大西雄二（委員長、総合地球環境学研究所）、
伊左治雄太（海洋研究開発機構）、風呂田郷史（産業技術総合研究所）
TEL: 075-707-2386

E-mail: M-JAOG_Election2023-ml@aist.go.jp（@を半角に変えてください）

<会長／副会長／監事／理事 立候補／推薦 届>

候補者氏名：

所属機関：

推薦者氏名：

2023 年 月 日（届出日）

2023 年 5 月 8 日

2023 年度日本有機地球化学会選挙管理委員会
大西雄二（委員長）

伊左治雄太

風呂田郷史

Announcement

2023 年度有機地球化学賞（学術賞）選考候補者推薦の募集

有機地球化学賞（学術賞）2023 年度受賞候補者選考委員会
委員長 山本 正伸

有機地球化学賞（学術賞）受賞者選考規則により、2023 年度同賞選考候補者の推薦を募集いたします。つきましては、下記を参照のうえご推薦ください。

記

候補者の資格：有機地球化学の分野で顕著な学術業績をあげた本会会員。

募集の方法：本会会員の推薦による（自薦他薦を問いません）。

推薦の方法：下記の事項を A4 サイズの用紙に任意の様式で記入し、メール（電子媒体(PDF)添付）にて提出してください。別途、委員長に電話で一報ください。

- 1) 候補者の履歴（年齢、大学卒業以降の学歴、職歴、その他）
- 2) 推薦の対象となる研究題目および推薦理由
- 3) 研究業績目録
- 4) 推薦の対象となる主要な論文 10 編（別刷またはそのコピー）
- 5) 推薦者の氏名と連絡先

締め切り日：2023 年 5 月 31 日（水）

提出および問い合わせ先：〒060-0810 札幌市北区北 10 条西 5 丁目
北海道大学 大学院地球環境科学研究院 地球圏科学部門
山本 正伸
電話 011-706-2379、ファックス 011-706-4867
E-mail : myama@ees.hokudai.ac.jp

これまでの受賞者と研究題目については <http://www.ogeochem.jp/archives.html>
（日本有機地球化学会HP「学会アーカイブス」）をご覧ください。

研究奨励賞（田口賞）2023 年度受賞候補者の募集

研究奨励賞（田口賞）2023年度受賞候補選考委員会

委員長 藪田ひかる

研究奨励賞（田口賞）受賞候補者選考規則により、同賞受賞候補者推薦を募集いたします。つきましては下記をご参照のうえ、受賞候補者をご推薦下さい。会員の皆様におかれましては、是非とも候補者ご推薦のほどお願い致します。

記

候補者の資格：生年月日が1988年4月2日以降であり、有機地球化学、石油地質学、堆積学の3分野のいずれかで優れた研究を行い、将来にも研究の発展を期待できる方。本会会員に限りません。

募集の方法：本会会員の推薦による（自薦他薦を問いません）。推薦の方法：A4サイズ of 用紙に下記事項を任意の形式で記述し、郵送するか、PDFファイルとしてE-mailに添付してお送り下さい。

- 1) 推薦理由及び研究題目
- 2) 研究業績目録
- 3) 研究論文の別刷りまたはコピー
- 4) 履歴書
- 5) 推薦者の氏名と連絡先

締め切り日：2023 年 5 月 31 日（水）（当日消印 有効）

提出及び問い合わせ先：〒739-8526 広島県東広島市鏡山1-3-1
広島大学大学院先進理工系科学研究科
地球惑星システム学プログラム 藪田ひかる
電話：082-424-7474
E-mail: hyabuta@hiroshima-u.ac.jp

これまでの受賞者と研究題目については <http://www.ogeochem.jp/archives.html>（日本有機地球化学会 HP「学会アーカイブス」）をご覧ください。

ROG が完全電子化、ROG 38 巻を発行 ROG 39 巻へ論文を投稿しましょう！

Researches in Organic Geochemistry

編集委員長 沢田 健

ROG (Researches in Organic Geochemistry)は本学会の学会誌であり、有機地球化学およびそれに関連する分野の研究論文を掲載し、昨年より冊子発行を取り止めて完全電子化に変わり J-STAGE に論文を公開しております。昨年巻である ROG38 巻(Vol. 38) 1号(Nos. 1)は、2022年12月に発行され、論文3編(すべて英文論文)、技術論文1編の計4編が掲載されました。表紙デザインは掲載された北海道大学低温研究所 山本倅多さんの英文論文の中にある図をもとに作成されました。

2023年巻である ROG39 巻(Vol. 39)は、1号(No. 1)は2023年7月頃、2号(No. 2)は2023年12月頃に発行し、その約1か月後に J-STAGE にて web 公開する予定で進めております。皆様からの積極的な論文投稿をお待ちしております。

現在の ROG の論文のカテゴリーは、1) 論文(article)、2) 短報(short article)、3) 技術論文(technical paper)、4) 総説(review)、5) 議論(discussion)になります。今年巻から、J-STAGE における J-STAGE Data (論文の補足資料や研究成果の根拠となるデータ、研究過程で得られた情報などを web 公開するデータリポジトリシステム) を有効に活用して、皆様の研究成果における大容量データの公開や、ROG の図表を Supplementary data 化して本文を簡素化するなどの改良を行っております。ぜひ、J-STAGE DATA をご活用ください。また、学会で発表された内容や、博士論文・修士論文成果の発表なども歓迎いたします。詳細は、学会ホームページの投稿規定(2022年10月改定) <http://www.ogeochem.jp/pdf/ROG_kitei_221018.pdf>をご参照ください。また、上記の枠に入らない論文や企画でも、有機地球化学の発展に貢献し、学会員にとって有意義な論文・企画であれば、随時、編集委員会で検討を進めます。ROG は研究分野・領域のボトムアップをより重視した性格の雑誌であり、日本の有機地球化学の技術者・研究者が提案する挑戦的・草分け的なアイデアなどを積極的に掲載したいと考えております。積極的に編集委員会にお問い合わせ下さい。その他、いろいろなご意見、ご要望、ご感想をお寄せください。

ご投稿・ご連絡は下記までお願いいたします。

PDF 添付ファイルによる電子投稿： sawadak@sci.hokudai.ac.jp

郵送：〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目

北海道大学 大学院理学研究院 地球惑星科学部門

沢田 健 編集委員長宛

(TEL: 011-706-2733, FAX: 011-746-0394)

編集後記

永く続いたコロナ禍も終わりを迎えそうで、オフィシャルにも行動がとりやすくなりそうです。今年度以降、国内・国際学会に積極的に参加できそうです。せっかくできたテレワークも上手く活用していきたいです。(金)

皆さま、ご無沙汰しております。昨年3月に生まれた息子も1歳になり、保育園に通い始めました。私も約1年間の育児休暇からこの5月に仕事復帰予定です。また皆さまにお会い出来る日を楽しみにしております。どうぞよろしくお願い致します。(菅)

AIの進化が凄まじく、研究生活の助けにもなりそうと感じていますが、一方でAIが提示する返答を吟味する能力を問われるようになりそうですね。(中)

発行責任者 日本有機地球化学会会長 奈良岡 浩
〒819-0395 福岡市西区元岡744 (ウエスト1号館A棟5階 W1-A-529)
九州大学 大学院理学研究院地球惑星科学部門
(TEL) 092-802-4216 (FAX) 092-802-4208

一般社団法人日本有機地球化学会 事務局
〒060-0819 北海道札幌市北区北19条西8丁目
北海道大学 低温科学研究所 同位体物質循環分野
事務局長 力石 嘉人
Phone : 011-706-5472 (直通)
E-mail : office@ogeochem.jp

編集者 金子 雅紀 (産業技術総合研究所)、中田 亮一 (海洋研究開発機構)、
菅原 春菜 (宇宙航空研究開発機構) :
e-mail: rog_nl@ogeochem.jp